

新規サ抜き・サ入れ表現から見る誤用と正用の分析

寺崎 知芝

京都大学大学院／日本学術振興会

strosuss@marine.odn.ne.jp

1. 本研究の目的

本研究の目的は、日本語の助動詞「そうだ」を語尾に持つ語の、動詞・形容詞との接続形式の通時変化を観察し、最近になって現れるようになった新たな形式での「サ入れ」「サ抜き」表現の振る舞いを分析することで、実際の言語使用から発生する用法の揺らぎを提示し、言語使用から引き起こされる形態変化を記述することである。

2. 「サ抜き」方向の現象

日本語の助動詞「そう(だ)」については、「まずそう」「言いそう」など、基本的に形容詞の語幹や動詞の連用形などに直接接続するものであるが、「語幹が一音節の形容詞である場合は間に『サ』が挿入される」事実がある(「なさそう」「よさそう」など)。この「サ」が何故挿入されるかについては厳密な理由は与えられておらず、単純に「なそう」「よそう」などという語形が音韻的に不自然なためであると考えられる。実際、純粋な形容詞「無い」の場合には「無さそう」の形が維持される傾向にあるが、他方で、他の名詞が「無い」と複合語を形成している場合や、語尾に「ナイ」の音を含む語句の場合、「サ」の挿入には揺らぎがある。(以下、例文は『日本語書き言葉均衡コーパス』に依る)

- (1) a. 大尉はいかにもすまなさそうに言った。わたしはどう応えたらいいのか、しばし言葉をさがしあぐねた。
 b. 「ねえ、ばあちゃんち、なんかおもしろいものある？」ときいた。おばあちゃんはすまなそうに、細い首をかしげた。

(1a)のように「すまない」という語の語幹を「ない」だと解釈するときには「ない」+「そう」のルールが適用されて「すまなさそう」となるが、(1b)のように「すまない」が1語であると理解されれば、語幹は「すまな」になるため、「サ」の挿入が起こらずに「すまなそう」と表示される。同様の揺れは、他の語にも観察される。以下の例は、頻度で見た時には「サ」の挿入が行われにくい語句に「サ」が用いられた実例である。

- (2) a. 「お金は、あなたにお願いするだけだけど…。メドがついたら、すぐに帰って来てね…」麗は、心もとなさそうだった。
 b. ごまかし半分で笑顔を向ける義明に、宮はつまらなさそうに吐息を漏らす。

このように、「サ」の挿入については、発話者の判断次第で多分な不確定性を持つものである。そして、こうした揺らぎを持つ事例に、近年さらなる変化が起こっている。具体的には、これまで語幹が「無い」と判断されていた語からの、「サ」の脱落である。(以下の例文は Web 検索に依る)。

- (3) a. それにしてもほんと会場のはっきり具合。分かりやすいものにしか反応悪いよねえ。
芸術性なんてとても関係なそう。

(<http://ameblo.jp/arcatoa/entry-10465856796.html>)

- b. 同一なバイナリにしないよう、自分の作成した部分を分けておけば問題なそうです。
(<http://sites.google.com/site/shirowiki/javade-jushorokuno-memo/h2dbno-raisensu>)

こうした「無そう」の用法は、直感的には違和感を覚える部分が多く、使用者も Web 上などの特定のレジスターに限られる傾向にあるが、既に誤用と言いきれないスケールで用法が広がっている。

3. 「サ入れ」方向の現象

翻って、逆の現象も同様に観察出来る。本来ならば「サ」が入らなかった箇所への「サ」の挿入である。端的な事例としては助動詞「たい」の語幹との共起現象があげられる。

- (4) a. てっつあんのにおいしいところがまるでなく、早く終わらせて帰りたいさそうなのがおかしかった。

(<http://aoimon.blog7.fc2.com/blog-entry-457.html>)

- b. 薫と異さんがチョコを食べたさそうにしてたから、仕方なくほんの少しだけ分けてあげたから。

(<http://www8.plala.or.jp/idsolitude/novel/valentine.html>)

動詞+助動詞「たい」+「そう」の形式は、本来どこをとっても「サ」が入る余地の無い形式のはずだが、何故か「サ」が入る例が散見される。これも、Web 上の記述などで見られる、近年における言語変化の例といえるだろう。ここまで不自然な用法でなくとも、「動詞語幹」+「助動詞のナイ」+「そう」という組み合わせの場合、本来サは入らないはずだが、比較的自然な用法として用いられる例も多い。

- (5) a. 色々考えましたが一番いいのは食べなさそうな観葉植物にする！事でしょうか。

(<http://oshiete.goo.ne.jp/qa/859260.html>)

- b. 一生お金に困らなさそうな人ってどんなイメージの人ですか？

(http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1222597427)

4. 考察

4.1. 「サ抜き」の動機

まず、本来あるべき「サ」が抜け落ちる「サ抜き」の場合、「サ」が確実に入る用例でおかしな「サ抜け」は、「無そう」「良そう」の2種類である。ここから「サ」が落ちる最も単純な理由としては、「他のソウ形接続はどこにもサが伴わないため」という単純な動機付けが考えられる。例えば同じように「ソウ」を伴う語でも「答えさそう」「走り出しさそう」などという言い方は絶対にしないわけで、あくまで「そう」の接続は「動詞の連用形、もしくは形容詞の語幹」に「そう」をつけるだけだ。そこには「サ」が入る余地など本来なかったはずである。「答える」にも「美味しい」にも「綺麗だ」にも「サ」が入らないなら、そこから類推して「無い」「良い」にも「サ」など必要無いはずなのだ。つまり、始めから無かったはずの「サ」が改めて無くなったというだけのことであるといえる。

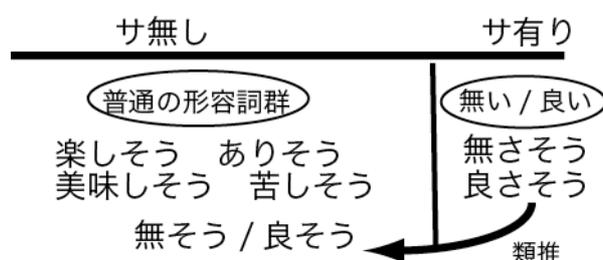


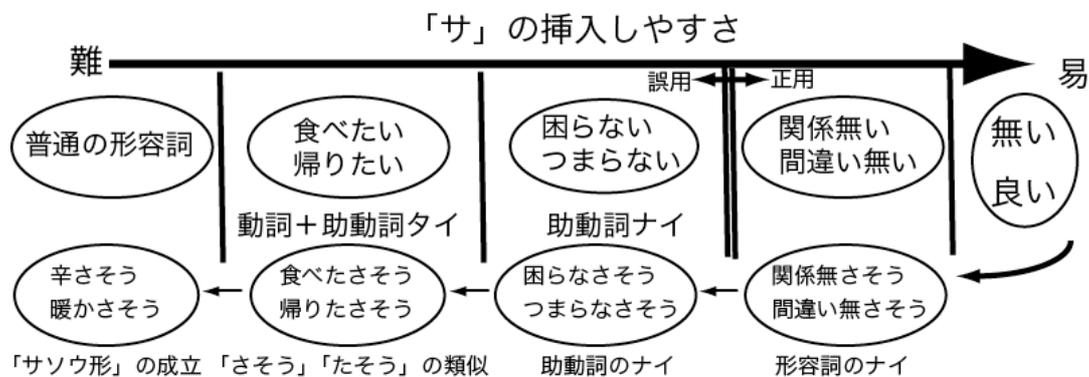
図1 サ抜きの要因

4.2. 「サ入れ」の動機

いわゆる「正しくない」サ入れの事例としては、Web 上では「帰りたさそう」「食べたさそう」「辛さそう」「寒さそう」「困らなさそう」などの例が観察されたが、おそらく容認度が最も高いものは「困らなさそう」などの「ナイ」形動詞との接続だろう。当然これらは、形容詞「ない」が「サ」を伴うという規則から類推されたものであると考えられる。「語幹が一音節ならばサを伴う」などというルールはあやふやなものであるし、助動詞のナイと形容詞のナイの区別など、日常会話では行わないのが普通である。このために、ごく自然に「困らなさそう」などの動詞のナイ形への「サ」の挿入が行われる。こうした「拡張」が行われたあとは、同様に助動詞「タイ」との共起も可能になるのではないか。「ナイ」が「ナサソウ」になるのであれば、似たような音型を持つ「タイ」が「タサソウ」となるのも自然な流れというものだろう。そこまで変化が進んでしまえば、助動詞「そう」が「さそう」という形を得たとしても不思議ではなく、「暖かさそう」「美味しさそう」などの形を取ることも、ひょっとしたら不自然ではなくなるかもしれない。

以上をまとめると、全く同じフィールドにおいて、サを入れる動機と、サが抜ける動機が同時に存在しており、このような語の用法は、どちらとも付かない状態を遷移していると考えられる。現時点においていえることは、あくまで「サが付きやすそうな語」と「サが付かなそうな語」に違いがあるということである。厳密な文法においては正誤の判断は可能であ

るが、どちらの動機についてもそれなりに説明力があるため、実際に広がり続ける言語運用の中において、「ソウ形」「サソウ形」の混在はさらに進みそうである。



5. 結論

こうした現象に興味深い点は、最初に提示した「すまなさそう」「すまなそう」のような揺れは文学作品や過去の累積コーパスなどの通時的用法として観察される揺れであるにも関わらず、「関係無そう」のような「サ抜き」や、「帰りたいさそう」のような「サ入れ」の語が現れだしたのは比較的最近であるということである。このように、近年になって著しい差異が生じ始めたことは、単純な語法、音韻的動機付け以外にも、言語の形式を維持してきた規範が存在する可能性を示唆するものである。Web上という新しいレジスターにおいてこの用法が広まっていることが、その証左ともなるであろう。

参考文献

- 小松英雄. 2001. 『日本語の歴史—青信号はなぜアオなのか』 東京: 笠間書店.
- 国広哲弥. 1991. 『日本語誤用・慣用小辞典』 東京: 講談社.
- 黒田航・寺崎知之. 2010. 「言語の「自然態」を捉える言語理論の必要性」, NLP16.
- 高田博行. 2009. 「歴史社会言語学の拓く地平 —人の姿が見える言語変化」『月刊言語』38(2): 34-41.
- 荻野綱男. 2009. 「WWWをコーパスとして利用する研究 —文系と理系の観点から—」, 『月刊言語』27(2): 4-9.

<コーパス>

KOTONoha 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』